

# 高梁川流域キッズ

たかはしがわりゆういき

高梁川流域ゆかりの

いじん けんじん とくしゅう

偉人・賢人特集



かつやく とし  
活躍した年:

1877~1945年



かつやく ぶんや  
活躍した分野:

しじん ずいひつか  
詩人、随筆家



ゆかりのある場所:

すすきだちゅうきんせい  
・薄田泣堇生家



すすきだ ちゅうきん  
薄田 泣堇

新高総早 倉敷市  
見梁社島 掛原口庄岡  
市市市町 町市市町市



すすきだちゅうきん めいじ ねん いま くらしきしつらじまちょうつらじま にしすすきだけ う  
薄田泣堇は、明治10（1877）年に今の倉敷市連島町連島の西薄田家に生まれました。

めいじ ねん いま けんりつおかやまあさひこうこう にゆうがく たいそう とくい  
明治24（1891）年に今の県立岡山朝日高校に入学しましたが、体操が得意でなくて

ねん ちゅうたい めいじ ねん じょうきょう ていこくとしよかん いま うえのとしよかん  
2年で中退しました。明治27（1894）年に上京し、帝国図書館（今の上野図書館）で

にほんぶんがく かんぶんがく せいようぶんがく すべ よ どくがく まな  
日本文学の漢文学と西洋文学を全て読むなど、独学で学びました。

こ どくしよず しづく めいじ ねん  
子どものころから読書好きで、すでに詩作りをしていましたが、明治30（1897）年

ぶんげいざっし しんちよげっかん どうこう ちょうたん べん し はなみつにしてみえがたし たか ひょうか しだん  
に文芸雑誌『新著月刊』へ投稿した長短13編の詩「花密蔵難見」が高く評価されて詩壇に

とき はじ ちゅうきん ころ ち  
デビューしました。この時、初めて泣堇の号（ペンネーム）を用いました。

こ だいいちししゅう ぼてきしゅう めいじ ねん はる たまひめ  
その後、第一詩集の『暮笛集』（明治33（1900）年）をはじめ『ゆく春』『しら玉姫』

にじゅうごげん かんこう めいじ しじん なかま ちやうてん ぎわ  
『二十五絃』を刊行し、明治の詩人の仲間の頂点を極めました。

めいじ ねん だ ししゅう はくようきゅう えんじゆくき むか ちゅうきん すべ しゅうせい  
明治39（1906）年に出した詩集『白羊宮』は、円熟期を迎えた泣堇の総てを集成し

あと じよじよ かつどう ぼ し さんぶん うつ しんたいし ぶんごていけいし  
たもので、この後、徐々に活動の場を詩から散文へ移していきましたが、新体詩（文語定型詩）

はってん ちゅうきん おお ぎょうせき  
を発展させたことが泣堇の大きな業績でした。

たいしやうかん ねん おおさかまいにちしんぶんしや にゆうしや たいしやう ねん まいにちしんぶん れん  
大正元（1912）年に大阪毎日新聞社に入社。大正5（1916）年から毎日新聞に連

さい ずいひつ ちゃばなし こうひょう ずいそうしゅう ちゃばなし たいしやう ねん のち ちゃばなし たいしやう  
載した随筆「茶話」が好評で、随想集『茶話』を、大正7年に『後の茶話』を、さらに大正

ねん しんちゃばなし しゅっぱん はくしき わじゆつ たく ちゅうきん さくひん おお  
8年には『新茶話』を出版しました。博識のうえ、話術も巧みだった泣堇の作品は、多くの

どくしや みりやう  
読者を魅了しました。

がくげいぶちやう あくたがわりゆうのすけ きくちかん めいせいだか さっか せつきよくてき み だ ぶんがくかい  
学芸部長として芥川龍之介や菊池寛など、名声高い作家を積極的に見つけ出し、文学界の

はってん おお こうけん  
発展にも大きく貢献しました。